様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：２１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２８４２

研究課題名（和文）グループ・キャリア・カウンセリング技法を用いた効果的なキャリア教育に関する研究

研究課題名（英文）The reserch on effective career education using group career counseling techniques

研究代表者
渡部　昌平（WATANABE, Shohei）

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・准教授

研究者番号：９０６１０８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍のため当初予定の小中高生対象の研究は行えなかったが、大学生を対象にグループ活動の効果・効率を上げる方法について検討を進めた。結果、グループ活動を活性化させる教員の働きかけとして「学生がやって面白いと思えるグループ活動をする」「席指定・席替えなど『普段と違うメンバー』と組ませる」「簡単なグループワークから開始して，少しずつ難しいグループワークに入る（いきなり難しいワークはしない）」「グループの人数を4人程度の少人数までおさえる」「短時間の自己紹介や共通点探しなどで，メンバーについて共通理解を深める」などの技法が効果的であることが把握された。他にグループ活動で学生が何を学ぶかも把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アクティブラーニングが盛んになっているが、教員側の働きかけや学生の意識によっては上手く成立しないことが知られていたが、教員がどう働きかけることが必要であるかが把握された。またグループ活動を通して学生にどんな変化が生じるかが把握された。
これにより今後の学生のグループ活動で教員側はどんな配慮をすべきか、介入をすべきかが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Due to the corona pandemic, the originally planned study for elementary, junior high, and high school students could not be conducted, but proceeded for university students. As a result of encouraging faculty members to revitalize group activities, "Do group activities that students think are interesting to do", "Reserve seats, change seats and team up with 'members who are different from usual'", "Start with simple group work and gradually enter difficult group work (do not do difficult work suddenly)", "Keep the number of people in the group to a small group of about 4 people", " By introducing oneself in a short period of time and searching for common ground, it was grasped that techniques such as "deepening common understanding of members" are effective. I also figured out what the students would learn in group activities.

研究分野：キャリア教育、キャリアカウンセリング

キーワード：グループ活動　普段と違うメンバー　段階的　少人数　リアクション　アイコンタクト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本は集団主義(Cross, 1995)の国であり、自己決定は周りにあわせるように自分を変化させる(Tweed, White, & Lehman, 2004) と言われる。日本の児童・生徒は（特に思春期以降）クラスの中で将来の夢を堂々と語り合うというよりも、目立つことを恐れて「発言しない」「人に合わせる／任せる」「行動しない／チャレンジしない」ことも少なくない。

1990 年代以降、日本の小中高校でも職場体験（インターンシップ）を中心にキャリア教育が根付いてはきているものの、このままでは「生きる力」を身につけ、「社会人として自立した人」を育てるのは困難ではないかとの危機意識を持っていた。過去のような第 1 次産業・第 2 次産業主体の大量生産・右肩上がりの時代ならともかく、サービス産業化・分業化・グローバル化・ＩＴ化が進む社会では個人が個別に自分の夢や目標を定め、個別に夢や目標の達成に向けて行動していく必要がある。

２．研究の目的

本研究は、欧米のグループ・カウンセリングやナラティブアプローチ技法等を参考に、自分の価値観・人生観を深く理解して他の児童・生徒に語り、他の児童・生徒が持つ異なる価値観・人生観を受け入れ、お互いの価値観・人生観に基づく選択を応援しあうなど対人関係や社会的つながりを学ぶことのできるキャリア教育が実行できるような教員研修の内容・方法について実践・効果検証するものとして設計された。

研究開始当初の背景を踏まえ、本研究では欧米のグループ・カウンセリング技法等を参考に、自分の価値観・人生観を深く理解して他の児童・生徒に語り、他の児童・生徒が持つ異なる価値観・人生観を受け入れ、お互いの価値観・人生観に基づく選択を応援しあうなど対人関係や社会的つながりを学ぶことのできるキャリア教育をクラス担任が実行できるような教員研修の内容・方法について実践・効果検証することを目的とした。

他方、コロナ禍の影響により大学研究者など外部人材が小中高校に間接的にも参加することが困難となり、対象を大学生に変更して大学の講義等でのグループ活動を効率的・効果的に行うための方法について検討することとした（技法について欧米のグループ・カウンセリングやナラティブアプローチ技法等を参考にすることに変わりはない）。

３．研究の方法

当初は教員免許更新講習等の小中高教員研修をきっかけに小中高校のキャリア教育担当者とつながり、小中高校のキャリア教育に直接・間接的に参与して小中校生を対象としたグループ活動に欧米のグループ・カウンセリング技法等を導入して効果・効率を検証する研究を進めることを想定していたが、思わぬコロナ禍の影響で外部から学校に入ることが全く困難となってしまった。

このため、急遽対象を大学生に変更し、大学での講義等で欧米のグループ・カウンセリング技法等を用いて行うグループワークを効果的・効率的に行う方法について、主に大学生への質問紙調査手法を用いて検討を進めることに変更した。

４．研究成果

教員や学生がグループワークの知見を理解することでグループワークが活性化することを示すことができたが、教員に比べ学生のほうが効果が低いことが把握された。これは「集団をファシリテートする」ことへの教員と学生の意欲や積極性の違いを表しているのかもしれない。またグループワークを活性化する教員側の働きかけとして「学生がやって面白いと思えるグループ活動をする」「席指定・席替えなど「普段と違うメンバー」 と組ませる」「簡単なグループワークから開始して, 少しずつ難しいグループワークに入る（いきなり難しいワークはしない)」「グループの人数を 4 人程度の 少人数までおさえる」などの働きかけを抽出した。

そのほか教職科目受講学生にグループ活動を実施し、「初対面の人といきなり会話をするのは難しいが、自己紹介やミニゲームを行うことで会話しやすい雰囲気が作られる」「一つの目標に向かうことで一時的ではあるが大人数の心が一つになり、会話が生まれる」「互いが互いを知ろうとするなどプラスな気持ちで臨 めば、自然とグループ全体の雰囲気が良くなる」「先生の側でクラスの雰囲気作りをすることは重要なことであり、効果的なことであることも分かった」「クラ スの生徒たちのことをよく知り、グループ外の人との交流ができるイベントをすることも大切」等の感想を得た。

また大学でのグループワークを多用する講義を通じて、学生は相手の話をしっかり聞き相手を尊重する重要性、相槌・リアクション・質問をする重要性、目を見る・アイコンタクトをする重要性などを学び、自分のことを話す・自分から話す必要性や経験を積むことの必

要性を理解するようになった。他方、「我慢する」「雰囲気を読む」「リーダーが仕切るべき」など自己主張をしない消極的な傾向も一部で見られ、集団の和を乱す人への対応についても「無視する、話をしない」あるいは「触れない」「何もできない」など攻撃的あるいは消極的な回答が一部で見られた。グループワークを多用する講義を通じて「嫌われたくないから話しかけられない」等と考えていた学生が、メンバーに受け入れられる等の体験を通じて「コミュニケーションは楽しい」という気持ちに変わっていき、積極的なコミュニケーションも見られるようになった。一方で、一部では攻撃性や消極性が改善されないなどの課題も見られたことを報告した。

さらに大学生の過去の進路指導を受けた経験・感想による質問紙調査から、具体的なキャリア形成支援を進めるためには、１対１の相談（具体的な職業の提示や相談・アドバイス）や実際に働いている人の話なども必要であることを示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 渡部昌平	４．巻 4(2)
２．論文標題 グループワークを多様する講義を通じた学生のコミュニケーション理解の変化に関する探索的検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本キャリア・カウンセリング学会TODAY	６．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 渡部昌平
２．発表標題 日本人の国民性に配慮したグループワーク運用の効果と課題
３．学会等名 日本キャリア教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shohei WATANABE
２．発表標題 Consideration of group approaches based on Japanese group principle
３．学会等名 KICSS202（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 渡部昌平
２．発表標題 グループカウンセリングを学ぶことによる学生の集団活動・人間関係等への影響に関する探索的研究
３．学会等名 日本キャリア教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡部昌平
２．発表標題 グループ活動を活性化させる教員の働きかけ
３．学会等名 日本ブリーフサイコセラピー学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡部昌平
２．発表標題 具体的なキャリア形成の効果的な支援に関する探索的研究
３．学会等名 日本キャリア教育学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関